

令和4年度 第1回 石狩市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和4年12月20日（火）9：30～10：40

2. 場 所 石狩市役所3階 庁議室

3. 出席者（構成員） 6名（全員）

総合教育会議構成員

| 役 職 | 氏 名 |
|----------------|-------|
| 市長 | 加藤 龍幸 |
| 教育長 | 佐々木隆哉 |
| 教育委員（教育長職務代理者） | 門馬富士子 |
| 教育委員 | 松尾 拓也 |
| 教育委員 | 根本 壽夫 |
| 教育委員 | 坪田 清美 |

関係説明員等

| 部 局 | 所属・役職 | 氏 名 |
|-------|---------------|-------|
| | 副市長 | 鎌田 英暢 |
| 生涯学習部 | 部長 | 蛭谷 学俊 |
| | 理事・次長（社会教育担当） | 西田 正人 |
| | 次長（教育指導担当） | 高橋 真 |
| | 総務企画課長 | 東 薫 |
| | 学校教育課長 | 森本 栄樹 |
| | 教育支援課長 | 鈴木 昌裕 |
| | 社会教育課長 | 斉藤 晶 |
| | 市民図書館副館長 | 岩城 千恵 |

事務局

| 部 局 | 所属・役職 | 氏 名 |
|-------|-------------|-------|
| 企画経済部 | 部長 | 小鷹 雅晴 |
| | 参事（政策担当） | 武田 知佳 |
| | 参事（政策担当）付主幹 | 笠井 剛 |
| | 参事（政策担当）付主査 | 青木 宏美 |

4. 傍聴者 なし（会議非公開）

5. 議題

- (1) 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果について
- (2) その他

6. 協議内容の記録（経過、質疑・意見）

○開 会

【小鷹企画経済部長】

- ・開会の宣言
- ・配布資料の確認
 - ①議事次第
 - ②出席者名簿
 - ③令和4年度全国学力・学習状況調査
～石狩市の結果分析と学力保障に向けての取組～
 - ④石狩市の「学びの保障」について
- ・本日の内容には、公表前の令和5年度予算案を含むため、石狩市総合教育会議会則第4条第1項ただし書きに基づき、非公開とする。
- ・議事録は、予算案確定後にホームページで公表する。ただし、同会則第4条第2項ただし書きに基づき、非公開とすべき内容を含む場合は、概要のみの記載とし、その他は全文筆記にて公開とする。
- ・議事録署名は、松尾委員に依頼する。
- ・始めに、資料に基づき教育委員会事務局より説明する。

○令和4年度全国学力・学習状況調査の結果について

【高橋次長（教育指導担当）】

令和4年4月19日に実施されました全国学力・学力状況調査の結果について説明いたします。皆様には、10月に教育委員会会議と市長報告で、その詳細をお知らせしておりますので、今回はそのポイントをお話しします。

3ページから7ページまで非公開

石狩市、全道、全国の平均正答率を比較分析した結果を報告

8ページから10ページは児童生徒質問調査の結果分析です。石狩市の児童生徒は落ち着いた態度で学習活動には取り組んでいます。調査から見えてくる学力保障の課題は、特に9ページ目・ゲームやSNS、動画視聴等のスクリーンタイムの長時間化、中学生の家庭学習時間の短さ、10ページ目・これまでよりも「主体的・対話的で深い学び」「子ども主体の学び」の視点からのさらなる授業改善が必要という3点です。

先ほども申し上げましたが、石狩市教育委員会は今回の結果を非常に厳しいものとしてとらえ、8月の定例校長会・教頭会以降、毎月この問題について取り上

げ、学力保障に向けた課題や方策を校長・教頭と共通理解を図ってきました。具体的には 11 ページ・12 ページに記載した 6 項目がその方策となります。いくつか説明しますと、11 ページ目、授業改革の視点をして「2. 対話を重視した授業スタイルへの授業改善」、「3. 国語科・読むこと領域における読解力の向上」、このことにつきましては、12 月 26 日・27 日に行う石狩市教職員ウインター・セミナーで講座を開催します。北海道教育大学札幌校吉野准教授や石狩教育局指導主事を招聘し、授業改善へ促進を図ってまいります。

12 ページ目、「4. 学校の方針・取組に基づいた朝学習・家庭学習の充実」特に、「AI ドリル等を活用した既習事項の確実な定着」についてです。先ほども申し上げましたが、学力保障上の課題として、「積み残しが多い。前学年の学習内容の確実な定着がなされていない」という点があげられます。AI ドリルは、子どもが受けたテストを分析し、できなかった問題にはその基礎となる新たな問題を AI が提示する。できた問題にはより発展的な問題を提示するという個別最適な学習が可能となります。「積み残し」という課題解決に向けた方策として、その有効活用を図っていききたいツールです。石狩市においては、令和 3 年度より「タブレットドリル」という商品がすでに利用可能となっています。次年度 4 月より一人 1 台端末の常時持ち帰りという方向性に向けて取り組んでおり、今年度はさらにエドテック導入補助金を活用し「すららドリル」の全校での試験運用を、また、業者に交渉して手上げた学校には「キュービナドリル」のトライアル導入も行っています。紅南小学校はモデル校として、先進的に「すららドリル」の有効活用を図っており、石狩市 ICT 教育推進担当者会議において、その事例を発表しました。教育委員会からは、紅南小に倣った取組の推進を市内各校に周知しているところであります。AI ドリルは学力保障に向けて有効なツールとなり得るものですが、その活用方法については、いまだ開拓分野であることを申し添えます。

この他にも、算数・数学の課題解決に向けた学力向上サポーターの増員等も必要かと考えております。令和 4 年度全国学力・学習状況調査の結果分析から、石狩市の子ども達の学力を保障する上での課題と方策について、その概要を説明させていただきました。

この後、学力保障・学びの保障に関わる予算についての説明は、森本学校教育課長からいたします。

○石狩市の「学びの保障」について

【森本学校教育課長】

「学びの保障」について、資料に基づきご説明いたします。既に、教育委員会会議や市長ヒアでも説明済ですので、簡単にご説明させていただきます。

1 ページをご覧ください。市内小中学校の「全国学力・学習状況調査」の結果です。ただ今、次長からも説明がありましたが、特に、中学3年生の国語と数学は、非常に厳しい状況となっております。

2 ページには、「学習状況と生活習慣」の結果を載せております。これも先ほど説明がありましたが、テレビゲームやSNSの利用時間が多い一方、学習時間が少ないといった結果となっております。

これらの結果を受け、市教委では、対策などを検討し、石狩の子どもに、自ら学び、考え、行動できる「自立した人間」として新しい時代を生き抜いていけるよう、必要となる「学力の定着・学習機会の確保」など、「学びの保障」に向け、各課が取り組むべき項目を、3 ページにまとめております。学校はもとより、市教委各課が連携して取り組むことが必要であり、①から④まで各取組みを掲載しております。①の学校教育課と次長班では、各学校では、それぞれ授業改革を進めることとし、道教委では「教育長会議」などを設置して、様々な対策を検討しております。市教委としては、教職員の力が必要ですので、中堅層の人事配置を道教委に要請するほか、各学校への人的支援や学習教材の充実を図ることが必要と考え、新年度予算要求を行っているところです。②の教育支援課においては、不登校児童生徒への支援、③の社会教育課においては、SNSなどの利用時間が多いといった課題解決に向けた対策、④の市民図書館では国語の「読むこと領域」の学力低下を受け、学校図書館の利活用といった対策を講じることとしております。各課の具体的な取組み内容については、4 ページから9 ページまでにまとめております。

始めに、5 ページと6 ページに、①の学校教育課と次長班の取組みを掲載しております。

5 ページには、「物的支援策」として、AIドリルの導入を掲載しております。令和3年度から、タブレット端末を導入し、それと合わせて「タブレットドリル」を導入しております。今年度末までに、この端末を各家庭に常時持ち帰って、家庭での活用を図れるよう、市教委では各学校に通知しております。新年度に向け、家庭でも多くAIドリルの活用ができるよう、学力向上やスクリーンタイムの低減、いわゆる、遊びで使う時間を少しでも勉強の時間に使ってもらえるよう取組みを進めてまいりたいと考えています。このAIドリル、来年度は、全児童生徒の半数程度を目安に導入していきたいと考えております。そのため、夏休み以降に、経産省のエドテック補助金を活用し、他のAIドリルの試行も実施しております。

6 ページをご覧ください。「人的支援策」として、中学校の数学の学力アップに向けて、学力向上サポーターの増員を行うことを要求しております。特に、中学校に重点的に配置していきたいと考えております。

次に、7 ページをご覧ください。②の教育支援課の「不登校支援事業」の取組みです。本市の不登校児童生徒数が8年連続増加する中で、多様で適切な教

育機会確保の拡充が必要であり、ふらっとくらぶのスタッフ体制の拡充を図ることと、また、学校内別室登校に対応した支援員の拡充をそれぞれ行うものがあります。

次に8ページには、社会教育課の「家庭教育支援事業」です。家庭教育の重要性から、「親子のふれあい」の基本的な視点を持ち、主な取組に掲げた多様なコンテンツの提供ができる「おうちでマナビー」ホームページの活用などを行うものであります。

最後に9ページであります。学校司書の専門性を活用した校内連携による学習能力向上への取組を行うこととし、学校司書を増員し、学校司書・学校図書館担当教諭・学級担任教諭がスクラムを組み、効果的な取組を通じ、読解力の向上を目指していくものであります。

こういった各課の取組を通じて、学びの保障に取り組んでいきたいと考えているところです。説明は以上であります。

○意見交換

【小鷹企画経済部長】

ありがとうございます。それでは、ご質問ご意見などあれば挙手をしていただきまして発言をお願いいたします。加藤市長どうぞ。

【加藤市長】

お疲れ様です。年末の慌ただしい時に開催をさせていただきました。一つの理由は、長年、教育委員として携わっていただいた門馬委員の任期が今月で最後ということで、できれば門馬委員がいる間に、今年度の総合教育会議を開催したいという思いがあったものですから、お忙しいところ申し訳ございません。よろしくをお願いいたします。門馬さん本当にお疲れ様でした。ありがとうございます。

それで、私はこの「学力状況調査」と「学びの保障」についての来年度予算案について、事前に説明は受けています。前段で申し上げますが、私は43年の役所経験ですけれども、教育行政に全くタッチしたことがございません。その中において、非常に疑問に思っていることが多くて、ぜひとも直接、教育委員さんのご意見も伺いたいと思い、こういう会を開かせていただいています。

学力が大変ですよ、ということはわかりました。それで、何かをしなければいけないと。そうすると、今後の取組みということで、各課がそれぞれ色々なメニューを考える。確かに何かを考えなければいけないけれども、それらが果たして実効性があることなのか、と思っています。役所というのは、何か問題が起こると対応策を考えるんです。セクションがあつたら、それぞれが何かを出す。しかし、自分としては、正直に言うと疑問に思うメニューもあるんです。無理をしているんじゃないのか、何かメニューを出さなければいけないから出したんじゃない

ないのか、というような。じゃあ、それに実行性があるのか、というのが、私としては疑問があるんです。

事務局からは、前段に教育委員さんにも説明をしたと伺っています。その中で恐らく、教育委員の皆さんも、それぞれのお立場の中で色々な考えがあるんだろうなと思っています。私としては、この今後の取り組み・対応策というものに対する皆さま方のご意見を聞きたい、ということですので、よろしくお願いします。

【小鷹企画経済部長】

特にその実効性の課題・問題のところ、具体的に言われた方がいいかもしれません。

【加藤市長】

最初の3ページ目で、道教委は教育長会議を新設するとありますが、これはまた道教委らしい考え方だと思います。道教委のことを言ってもしょうがないのですが。

例えば5ページ目のAIドリルの関係ですね。令和4年度中にも5校限定で、これは試行実施中ですよ。そして、12月を目途に効果を検証するとあります。その効果検証した結果が出ているのかどうか私はわからないのですが、新年度には半数程度で導入をするという部分があります。普通、この効果というものは、ある程度の検証をしてから次に進むのだろうと思っていますが、何か急いでるのかなという感じがあります。

それから8ページ。これも予算ヒアリングの際に意見を述べさせてもらったのですが、「おうちでマナビー」ホームページの活用は、正直に言って、活用してもらえるのか疑問に思っています。大変厳しい言い方をして申し訳ないですが、私からは以上です。

【小鷹企画経済部長】

はい、ありがとうございます。これは多分、教育委員会の方で説明されていると思いますので、教育委員さんの方で、それぞれのお考えがもしあれば、いただければと思います。効果の部分ですとか、その実効性の課題や問題みたいなことだと思います。

【松尾委員】

それでは、率直な意見ということなので、私も思うところを何点かお話しさせていたいただきたいと思います。

私も、今、市長が触れられたところ以外で、実際に感じているところもないわけじゃないのですが、例えばAIドリルについて、紅南小学校がモデル的というお話があったと思いますが、その効果が実際どうなのかというところで、モデ

ル校の取り組みを広げていくということであれば、モデル校でやっぱりある程度実績があるということが大事かなと思います。

それと、もう一つ単純な問題として、持ち帰りをして、おうちでタブレット学習をしてもらう、それ自体は悪いことではないと思うし、もともとそういう方向感を持って取り組んでいる事業でもありますのでいいのですが、その反面、特に小学校の低学年にとっては、重たすぎる、といったところも出てくると思いますので、そこについても心配りというか配慮が必要なところなのかなという気はしております。

あともう一つは、スクリーンタイムが非常に長いということですが、自分の家庭の中で子ども達の状況を見ても、まあ長いなと思っております。ただ、これを削減してもらうというのは、子ども達もいることで、なおかつ、先生方の手を離れた家庭の中での事なので、言うは易しですが、非常に難しい問題だと思っています。授業の中で、全てを理解して覚えてもらって、非常に難しいでしょうけれども授業のやり方を工夫する、授業と家庭の中での勉強目標に相関性をつけて行くと、何か解決できないかなと。要するに、テレビゲームをやめろと言う前に、何か考えることができるのではないかという気が少ししております。

本来は事前に説明を受けているので、あまり細かいことを言うのはどうかと思っていたのですが、市長から率直な意見をと言っていたので発言させていただきました。以上です。

【小鷹企画経済部長】

松尾委員ありがとうございました。他の委員の皆さまいかがでしょうか。

門馬委員。

【門馬委員】

昨年までの総合教育会議で、アウトリーチっていう考え方がありました。こちらから出かけて行って、困っている家庭に手を差し伸べるという。私の個人的な考えですけど、成績が振るわない層「伸びしろ層」というのは、おそらくいわゆる貧困家庭であることが多いであろうと。そこでは親が一生懸命働いていて、子どもの面倒を十分に見られない。従って、子ども達のスクリーンタイムが長くなってしまったり、十分な食事が定期的に与えられなかったりというような、そういう困った状況が起こっている例が多いのではないかと。それで、アウトリーチという考え方がありましたけど、その後どうなったっていうのをお聞きしてませんよね。ちょっと教えていただけますか。

それから、市長が率直にとおっしゃいましたが、この社会教育の施策、親子の触れ合いうんぬんという、これは確かに市長がおっしゃるように、いくらプログラムを作ってもそれを利用しなければ効果は上がらないわけで、果たして一般の

家庭で、親が子どもと一緒に見ようよって言うことになるのかなという疑問は私も持ちました。

それから、あちこち話が飛んでしまいましたが、資料7ページの比較的成績がいい学校を見ると、小規模校が含まれています。その理由としては、先生方の目が行き届いていて、子ども達のケアが十分にできているからではないかと思えます。逆に、大規模校はなかなか手が回らないのではないかと、つまり、先生方の数が十分にあれば、多分大きな学校でも成績はあげられるのではないかと。そういう意味では、できるかどうかは別にして、人的資源を投入すれば、これはある程度解決するのではないかと、というのが私の個人的な印象です。

それで、先ほどの、家での学習やスクリーンタイム等々が、学校現場を離れたところというのは、行政としてはなかなか手が出しにくいところですよ。学校の先生方は本当に一生懸命、給食の時間も切り詰めながらやってくださっているということはよくわかります。ですから、学校はもういっぱいいっぱいだろう。じゃあ、家庭はどうするんだといった場合に、こうすれば解決するというのを私は申し上げられないですが、おそらく石狩の場合は、この家庭の問題というのが大きいのかなと思います。でも、それをどうやったら解決できるんだろうか、行政として何ができるんだろうかっていうのが、ずっと考えてきたことですが、でも、残念ながら名案は浮かびませんでした。

あちこち話が飛んでしまいましたが、そんなところです。

【小鷹企画経済部長】

はい、ありがとうございます。まずアウトリーチの件は、本日子ども施策の担当は私ではないので、私からお答えさせていただきますと、貧困やひとり親の家庭には、国の施策も合わせて3年ほど前から、アウトリーチという事が始まっています。その効果・検証というのが、しっかりできてるとは思っておりませんし、それに対して定量的に測れるものもないというのも難しいところです。ただ、家庭の問題というものに、行政としてはしっかりと手を差し伸べている状況にはなってございます。

教育委員会事務局から何かありますか。今、門馬委員がお話しされた学校の先生の問題だとか、小規模校について。

【高橋次長（教育指導担当）】

今回の資料に、全国平均を上回った学校ということで、小学校4校、中学校2校記載させていただきました。門馬委員がおっしゃるように、比較的小規模の学校は目が行き届いている。先生一人に対する児童の数も当然少なくなっていますので、その点が大きいかなと思われそうです。

今回のこの調査で、クロス分析というのがあります。児童生徒質問紙の項目でポイントが高かった項目と、学力の相関を見るのですが、その関係で見ると、全

国的にスクリーンタイムが短い学校は学力が高いですとか、家庭学習時間が長い学校は学力が高いというのがございまして、この小学校4校・中学校2校ともスクリーンタイムは短いです。それから家庭学習の時間も長いです。市内の各校と比較しても全国と比較しても多いです。ですので、やはりこの点は、家庭でのことにはなりますが、保護者の皆さんへの啓発も含めて、スクリーンタイムの適正化、家庭学習の重要性は、我々は訴えていかなければならない問題ではないかと思っています。永遠の課題かもしれません。訴えたからといって、本当に実効性や即効性があるとは限りませんが、その訴えをやめることは、我々としてはできないと思っております。

また、これは因みの話になりますが、平成31年の全国学力・学習状況調査のクロス分析では、朝食を食べている子ども学力が高いという結果が出ています。今回の結果では、その関連は見てとれなかったのですが、過去にはそういう結果もありました。ですから、家庭に起因するものは多いです。我々は、ご家庭に協力いただくように啓発は続けていかなければいけないという思いはあります。以上です。

【小鷹企画経済部長】

はい、次長ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

根本委員いかがでしょうか。

【根本委員】

市長が心配されるように、相反するようなことが施策として行われるような感じがあるかなと思います。スクリーンタイムが長くて心配だということにも関わらず、家に帰ってAIを使った自学自習をするという、なんというか、共倒れ的になってしまわないかと。やめなさいと言っているのに、家でそういうものに触れなければいけない。そして、そのことから、子ども達の体への歪みみたいなもの生まれてくるかもしれない。目が悪くなっている子どもがすごく多くなっている、あるいはランドセルが重くて姿勢が悪くなってまでタブレットを運んでいるという実態もある。ですから、やりますと言ったことがうまく進むとは限らないので、気をつけていかなければいけないと思います。

今、次長からありましたが、良いと思うことは家庭へどんどん啓発して進めていく、という努力は絶対に継続して進めていくべきだと思います。でもその前に、子ども達を取り巻く、総合的な見方はしてあげなければいけないという気がします。

【小鷹企画経済部長】

ありがとうございます。教育長お願いします。

【佐々木教育長】

今の根本委員のお話ですが、スクリーンタイムというのは、勉強をしている時間ではないんです。パソコンとかスマホで、ゲームとかSNSとか、そういうのをしている時間という事なので、AIドリルをしている時間はスクリーンタイムには入っていないです。我々としては、AIドリルをやることによって、これまでYouTubeを見ていた時間を勉強の時間に振り替えられるのではないかと、そういう狙いもあって、AIドリルを入れたいと考えております。

【小鷹企画経済部長】

確かに、触っている端末的な物は一緒なので、切り替わるといいのかもしれませんがね。他にいかがでしょうか。

【坪田委員】

小学生の孫がいるのですが、私は、ゲームとかYouTubeとか、要するに端末を使う時間が少ない方がいいんじゃないのと言うんですけども、今のご時世これがないと遊べないんだよと、親はそれを悪いものというふうに押しえてないわけです。私達も、仕事となるとパソコンを使いますよね。会議もペーパーレスで。これを悪者にはできないのかなと思っています。ですから、AIドリルとかは、うんと有効に使っていくべきだと思います。きっと時代的にもう、それを肯定的にとらえなければならぬのかなと。今の子は、テレビを見るかと言うと、テレビは見ないんですよ。私なんか、昔はテレビばかり見てました。帰ってきたらつけて、寝るまでついてて、そういうのが今は無いんです。そう考えると、切り替わっていった部分もあるし、否定して無くすような方向にはきっとできないだろうと思っています。どう使っているかと思ったら、下を向いて姿勢が悪くしたらダメだからって、ちゃんとテレビみたいな機械を買って、体を真っ直ぐにして見るようにしているんです。ですから、もう時代がそうなっているのかなと思います。

それから、私は、20時半までやっている認定こども園にいます。やはり、お母さん達の働き方、特に片親世帯などの働き方をみると、20時過ぎにお迎えに来ていて、「家にいる小学生の兄弟とか、どうしてるの？」と聞くと、「ゲームしてカップ麺食べてるから大丈夫」って言うんです。この働き方ですよ。でも、働かないと食べていけない。その保護者に「ちょっと遅いんじゃないの」とか、それこそ家庭に入り込めないわけです。親が働いてる間、ゲームして、カップ麺食べて、それから勉強するかというと、アウトリーチって言いますが難しいなと思います。

全国で見ると、おじいちゃんやおばあちゃんがいるような、核家族じゃなく生活しているところが、やっぱり成績はいいですよ。そういうサポートがある家庭は、早くにご飯を食べさせたりできて、親が働いていても、おじいちゃん・お

ばあちゃんが側にいることによって、落ち着いた生活というか、安定してるというのがあるのかなと思います。だからといって「おじいさん、おばあさんと同居したらどうですか」とも言えないわけですから、本当に難しい問題です。そのところを、どうやってやってくんだらうと。私は、寺子屋みたいな形で、例えば根本委員みたいな方のところに学校帰りに行って、わからないところを教えてもらうとか、そういうのがあるといいと思います。スクリーンタイムが長すぎるといっても、そこだけを切り口にはできないと思うし、家庭学習が少なすぎるといっても、働き方を含めた家庭の問題があるし、朝食はシリアルに牛乳をかけるぐらいはできるのではないか、とか思います。

それから、定着と積み重ねという部分では、時間が経ってからする試験だとできなくても、今日テレビでやっていたのは、次の日、一週間後、一ヶ月後、と何度かやると覚えているんだそうです。昨日覚えたことを、みんなわかってるなって確認して、一週間後またやるからなって言う。そして一週間後にまたわかってるか確認して、そして一ヶ月後に小テストをやったら、いい点数だなって褒める。そういう成功体験的なことを積み重ねていかないと、伸びしろ層の子はわからないってなるわけです。前のことがわからないと、次のことは積み重ならないですから、スモールステップを積み重ねられたら、そしてもっと褒められたら、成功体験を積むことによって、良くなっていくのかなと思います。以上です。

【小鷹企画経済部長】

坪田委員ありがとうございます。手段と効果、実効性と効果、あと、家庭に起因する問題だ、というようなことですね。はい、門馬委員。

【門馬委員】

寺子屋ができるといいねっていうのは、私もアイデアとしては持ち続けてきました。こども食堂がありますが、これを地域の力で拡大していけないか。学校からランドセルを背負ったまま門馬の家に来る、そうしたら温かい部屋とおやつが待っていて「ちょっとわからないところがあるんだよね」「私もわかんないけど一緒に勉強するか？」っていう雰囲気のある場所がある。「父さん、母さん何時に帰ってくるの?」「8時」「8時までなら、ちょっとおなかすくね。じゃあインスタントラーメンでも食べていようか」というようなね。そんなことが、地域のおじいちゃん・おばあちゃんの家でもできればいいなって、しみじみ思うんです。そうすると、スクリーンタイムも減るし、一緒に宿題やろうかと促すこともできる。桧山地方だったと思いますが、道内で成績が抜群に良くて、原因は何でしょうかと坪田委員が質問されたときに、いや、祖父母のいる家庭なんですよっていうお答えでした。まさしく、その辺がポイントかなという気がします。実際、石狩で祖父母と住んでる子どもって、すごく少ないと思うのですが、血は繋がってないけれども子どもの面倒をみてもいいよっていう地域のお年寄りはいら思

います。もちろん、事故が起こった時にどうするという責任の問題もあるので難しい問題ですが、こども食堂が出始めたんですから、こども食堂をもっと小規模にして、箇所を拡大していく、そういうことやってくれませんか。市で食事代の一部補助は出します、農家から売れ残った野菜をお届けします、お米もあげます、だからお宅で茶の間を貸してくれませんかねっていうようなことを提案したら、私なら手を上げます。私、教育委員は終わりますけれど、もしそういうことやっていいよっていうことでしたら、私は手を上げます。おそらく、石狩市民の方には、高齢者も多いですけど、元気な人たちは、何か地域のお役に立ちたいと思ってる方々も多いと思っています。実際に、高齢者の集いがありますよね。ふれあいサロンを5年やっているという知り合いがいます。あれを子ども版にしてみるとか。お年寄りが来てもいいのですが、子どもと一緒に遊ぶ、タブレットやスマホを逆に子どもに教えてもらう、昔の話をおじいちゃんが子どもにする、そういう場所があればいいなっていうのを、私はずっと夢に描いてきたんです。いや、実現可能かどうかは別ですよ。でも、こども食堂ができているわけですから、あれを何とかして拡大できないかなというのが私の密かな願いです。

【小鷹企画経済部長】

門馬委員ありがとうございます。他にご意見ありますか。松尾委員。

【松尾委員】

今、坪田委員のお話を伺っていて、改めて思い出したのですが、この学習状況調査、以前は確か「テレビの視聴時間」だったと思います。結局、テレビを見ていた時間がネットに切り替わっているだけで、受動的に何かをずっと見ているということ自体は、実はあまり変わっていないのではないかという気がします。それで、そのパソコンとかタブレット自体は、もう必要不可欠ですし、我々で言えば仕事にも使うし、ぼーっとネットサーフィンをしているかもしれないし、っていうのと同じですよ。ですから、使い方だとは思いますが、AIドリルとかっていうのは、きっと、学習の中でドリルをやるということに関しては、パソコンやタブレットが得意とするところかなと思います。いきなりそこまで行くのは難しいかもしれませんが、例えば、明日の授業のガイダンス的なもの、こういうことをやるよっていうのを事前に告知しておいて、ある程度頭に刷り込んでおくというのもIC機器が得意とするところなのかなと思ったりします。授業は、そこをみんなで議論したりだとか考えたりとかするところに重きを置いて、そこに時間を費やすというような形の授業改善についても、今後できていけたらいいのかなと個人的に思ったりします。

あと、こども食堂の話も出ましたが、やっぱり授業の中で、なかなか全部は定着できないというか、時間が足りないというところだと思います。どこでその時間を補っていくかということによって、学校の授業みたいな形ではなくて、寺子

屋的な感じで時間を過ごして、勉強だけではなく色々なことをしながら、そこで定着を図るのが理想で、そういう意味では、こども食堂みたいなのも本当にいいなと思っています。個人的に思うのは、自分たちの持っている場所だとかで、こども食堂をするのは結構大変だと思うので、例えば学校だとか、地域の集会施設みたいなところを使って、そういったものも使ってやれるようになると、だいたい徒歩圏内で配置されていますので、子どもも通いやすいし、運営する大人の方も手を上げやすいというか、始めやすいのかなと思ったりしています。今後、そういったところも考えていければいいなと思います。以上です。

【小鷹企画経済部長】

松尾委員ありがとうございます。

他にご意見ございますでしょうか。はい、坪田委員お願いします。

【坪田委員】

こども食堂のお話が出ましたが、私も色々調べて見ていたら、今は月に2回とかで、これではなって感じもしないでもないですよ。もちろん毎日だと大変ですけども、やはりランドセル背負って、帰りに毎日でも行けてっていうところがあったらいいなと思います。

うちの法人は、お年寄りの施設もあるので、ケアハウスとかに行くと、例えば、素敵な民謡や日本舞踊を見せるという行事があるんですよ、提供する行事というか。でも、それよりも、子ども達と一緒に花いっぱい運動の花を植える、子ども達はただ花を1個ずつ運んでいただけなんですけれども、一緒にやるとか。お年寄り達って、何かをやってあげたくてしょうがないんです。「ちょっと待ってなさい」って言って、お部屋に行って、紙袋やビニール袋に入ったお菓子を必ず持ってきて、「食べさせなさい」って言うんです。それから、子ども達がおみこしを持って、お祭りみたいにして行くと、もう、お賽銭がいっぱい入るんです。子ども達も、やった～！みたいな感じ帰ってくるんですけど。お年寄りは、提供されるより、やってあげたいの。そうすると自分の自己肯定感やら生きがいに繋がる、生きてるぞっていうね。ですから、色々なことをやれるお年寄りはたくさんいるので、おそらく門馬委員がそういう場所を作ったら、私は料理が得意だからっていう人などがたくさん集まるとかね。なにも、勉強を教えなくてもいいんです。もっとう、気楽にとか、毎日とか、続けてとか、そういう部分の実効性を期待します。

【門馬委員】

私は15年前に地域食堂というのやりました。それは、佐々木教育長が部長時代にお世話になったんですけどね。その時の考え方は、地域の中に色々な方がいたので、特に食に欠けるお年寄りを対象に、でもお年寄りだけじゃなくて、どなた

が来てもどうぞ、おしゃべりしながら食事しましょう、そういう場を作ろうという活動だったんです。その時に、ビジネスとしてやるのは失敗したと思いました。続けられませんでしたので、あれは失敗だったんですけど、これをボランティア活動としてやるのならばいいな、今ならこども食堂だなど、しみじみ思うんです。あのときは失敗しましたがけれども、次にやるときは、やれるかどうかわかりませんが、何らかの形で、地域の力、地域の人材の力を引き出せるような、そういうことができないかなと思っています。今、坪田委員がおっしゃったようなことができればお互いに幸せじゃないか、地域のお年寄りも子ども達も、そんな気がします。

【小鷹企画経済部長】

他にございますでしょうか。よろしいでしょうか。

【鎌田副市長】

門馬委員とか坪田委員のお話の部分では、そういう地域にある財産を活用するってというのは一つの方法なのかなと思います。子ども達がどこかで集まって学習するにしても、誰かが教えたりしていかなければならない。その学習っていうのは、学校の学び以外にも色々な学びがあると思います。先ほど坪田委員がおっしゃっていたようなことは、いわゆる社会教育の一環なんですね。だから、ここで書いてあることはいいけれど、そういうことも含めて社会教育としてどうしていくかっていうことを、これから考えていかなきゃだめだと思います。

正直、私が教育委員会にいたころは、こう言ったらちょっと怒られるかもしれないけれど、石狩の子どもって、確かに学力はそんなに高くないなど。ただ、基礎学力が身につけていて、元気であればいいかな、と思っていたので、学テの結果についてはあまり心配していなかったんです。でも、今回は中学校の国語・数学が相当低いというこの状況で、この辺はなんとかしなければならぬのですが、これまでも、学校も含めて一生懸命やっているんですよ。それが今回の結果を見て、更なる取り組みが必要ということになるんでしょうけども、やり方を変えてかないと、なかなか学力は身につかないのではないかと思いますし、学校だけに任せるのではなくて、家庭でもやらなければならないし、地域でもやらなければならない、総合的な部分を見ていかなければならないと思っています。色々な方法がこれから出てくることに期待したいと思っています。

元気な子どもが育っていけばいいのかなと思っていますので、ぜひ教育委員会、学校も含めて頑張っていたきたいと思っています。以上です。

【小鷹企画経済部長】

副市長ありがとうございました。他よろしいでしょうか。佐々木教育長お願いします。

【佐々木教育長】

色々のご意見が出ましたけども、今1人1台の端末があたって、これをどうやって活かして子ども達の資質能力を伸ばしていくかということを考えると、AIドリルっていうのは、多分これから標準装備にならざるを得ないんですよ。それであれば、一刻も早く手がけた方がいいだろう、ということは自信をもって言えます。企業誘致促進条例みたいなもので、これを入れたから絶対オッケーとは言えないけれど、スタートラインに立つためには必要なものだという感覚はあります。実際は、端末の重さの問題とか、そういう話は確かにあります。ただ、2年後にはデジタル教科書が入ってきますから、そうするとまた重さの問題というのは違う展開になっていくと思いますし、スクリーンタイムの話をこちら側サイドから切り込んでするとすると、家庭に対する啓発もありますが、これまでずっと啓発をやってきてもそんなに変わってきてないということを考えると、やっぱり子ども達自身に、自分で変わっていこうという何かきっかけを与えないとダメだと思ってます。そのための武器にもなるのではないかと考えています。とにかく、今の教育が目指しているのは、自分の学びを子ども達が自分で調整していく力をつけてやるということ。それをしないと、この先、社会に出ても、指示待ちになってしまうだけで、それでは日本は沈没するっていうのが、今の教育業界の感覚です。ですから、子ども達を、自分で考えて自分で動けるようにするために何が必要だろうっていうことを、考えていきたいなと。そのための第一弾が、今回の予算要求でございます、というあたりを、ぜひご理解いただきたいと思えます。以上でございます。

【加藤市長】

例えば、学びの保障の取り組みの各施策ですが、校長会・教頭会はどういうご意見ですか。みんな、いいねいいね、という感じなんでしょうか。中には、そうじゃないんじゃないのっていう反対意見とか出ないもんなんでしょうか。

【佐々木教育長】

今回、予算を上げてるものの中では、反対する人はいないです。予算要望委員会というのが、来年度の予算要求事項を検討していますが、その中でもAIドリルの話とか、人的支援の話っていうのは、重点項目として出てきていますから。

【加藤市長】

意見を言えないような雰囲気の間ではないのでしょうか。そこがよくわからないんですよ。本当に、みんなが意見を言いやすい、風通しのいい校長会・教頭会なのか。いやいや、教育委員会が言ったらそれはもう従います、というものなのか。その辺の実体が分からないのですが。

【 鎌 田 副 市 長 】

どちらかという石狩市は、そんな雰囲気ではないです。自由に意見を言える校長会・教頭会になってるはず。それが変わってたらちょっと問題ですが、私がやっていた頃はそういう雰囲気でした。その辺は、市長が心配しているようなことは無いと思います。

【 佐々木 教育長 】

予算要望委員会のプロセスとして、学校からボトムアップで上がってきています。各学校で必要なものを上げてきて、最終的に取りまとめた中で、じゃあこれを重点にしましょう、みたいな感じでやっているはずです。

【 蛭谷 生涯学習部長 】

資料3 ページ学校教育課の部分にあります、AIドリルや人的支援の学力向上サポーター、それから教育支援課の部分についてもやはり、学校現場からの要望として大きいものもあります。また、学校図書館の充実というのも上がってきてますので、そういった部分では、教育委員会、学校ともに連携を図りながら、施策とか予算要求という形に活かさせていただいています。

【 小鷹 企画経済部長 】

乖離も少ないということですね。他にご意見等ございますでしょうか。坪田委員どうぞ。

【 坪 田 委 員 】

私は教育委員会に入って、学校は本当に一生懸命やっているなと思います。いっぱいいっぱいだって、おっしゃいましたけど、本当にそうなんだと思っています。ですから、今回の結果もこんなに分析して、きっと、ちゃんとやって一生懸命なんですよ。

それで、ほとんどの親が働いていますから、放課後児童クラブ（学童）ですよ。そこがすごく混んでいて、ふれあいの杜児童館にもできましたけれど、そこが寺子屋化していけばいいわけです。昔は、おやつを出したもんですが、アレルギーの子が危ないからとかで、今はおやつを出していないんです。アレルギーの一人のために、全員のおやつを止めてるんですよ。うちの孫も児童クラブに行ってますけど、行っている間に、宿題をやってくれてるので助かってます。さらに、札幌の場合は、自分のおやつを持って行って、それを食べていい時間みたいなものもあるようです。人的配置も少ないし、40人で1単位など、単位も大きいです。そういうところに、もっとボランティアのおじいちゃん・おばあちゃんを入れたって全然オッケーだと思うんですよ。子ども達って、編み物とか大好きですよ。一緒になって編み物をするとか、教えてもらうとか。食べるのも、や

っぱりみんなでおやつを食べたらホッとするじゃないですか。そういうあたりも含めて、あそこが寺子屋化してくってという方向もあると思います。中学校区・小学校区にひとつずつあるわけですから、もっとマンパワーも入れて、ボランティアも入れて、行きたいっていう場所にしていけばいいと思います。

【小鷹企画経済部長】

ありがとうございます。

【松尾委員】

せっかくあるんだから、そこで食事も出してあげられればいいということですよ。ボランティアにポイントつけて、地域通貨みたいにしてもいいですよ。

【小鷹企画経済部長】

門馬委員どうぞ。

【門馬委員】

力をどう付けようかっていう議論では、我々教育委員会としては、教育の分野から見た場合にはこういう施策だよねっていうのは出てきます。でも、人間は教育だけで成り立っているわけではなくて、その背後に暮らしというものがあるわけです。だから、その暮らしにまで目を向けてトータルで施策を組まないと、教育の分野だけでいくら予算付けをしても学力は伸びないかもというのが、私の個人的な意見です。教育委員会も学校現場も精一杯やっていると思います。

【小鷹企画経済部長】

ありがとうございます。「街づくりは人づくり」と言われていますので、そうだと思います。他にご意見ございますでしょうか。

【鎌田副市長】

ウインター・セミナーについて、このコロナ禍でも開催していたのか確認したい。サマー・セミナーも。

【高橋次長（教育指導担当）】

新型コロナウイルスの感染防止対策上、令和2年度、令和3年度の2年間は開催していないという状況です。

○その他

【小鷹企画経済部長】

はい、よろしいでしょうか。最後に、その他として何かございますでしょうか。なければ、前段お話がありましたけども、今週の 24 日を持ちまして、任期満了により、門馬委員が教育委員を退任されます。平成 22 年 12 月 25 日より、長きにわたり教育委員として市行政、特に教育行政にお力添えをいただきました。本当にありがとうございます。最後にひと言いただけますでしょうか。

【門馬委員】

12 年ですから中学校卒業です。これで一人前になれるという保証は全然ないのですが、一応、義務教育は終わりますので、次の方に活躍していただこうと思います。本当にこの 12 年間ありがとうございました。

【小鷹企画経済部長】

門馬委員ありがとうございます。お時間となりましたので、以上で本日の会議を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(閉 会)

令和 5 年 2 月 22 日

署名委員

松尾 拓也